

主題を膨らませ、自分なりに工夫して表すことができる児童の育成

—造形的な見方・考え方を十分に働かせることのできる指導の工夫を通して—

特別研修員 図画工作 富山 亜紀穂 (小学校教諭)

児童の実態

材や道具を自由に選びながら造形活動を楽しんでいるが、造形的な見方・考え方を十分に働かせることができない児童もいる

6年 絵に表す 題材名：『雲をのぞいたその先に』全7時 造形的な視点【奥行き】

【であう過程】

手立て1

造形的な視点について感じたことを自分なりの言葉にする体験活動の設定

筋斗雲に見立てながら「重なる」奥行きを感じているようだ。

雲フィルムを重ねると
先生が筋斗雲に乗って
いるみた～い！

奥行きって
何だ？

今回は「奥行き」を捉え
られるようにするぞ！

体験して感じたことを言葉にする

雲がだんだん小さくなっていると、空に奥行きが出る「手前と奥」に気付いたね。空の奥行きを生かした主題になりそうだね。

雲がだんだんちっちゃくなって
いくと、奥行きを感じるね。
空の奥の方まで表せようだね！

【あらわす・ひろげる過程】

手立て2

造形的な視点に着目して、自分の活動を振り返ることができる場の設定

展示の場

つくる場

振り返り！

もどこちに来る
ように表すには、壁の
通り方も工夫した方が
よさそうだよ。

表す→振り返る→さらに表す

いつでも絵を見ながら話せる場で、友達と交流しながら自分の工夫を振り返ることができた。さらに奥行きを表す工夫として、薄い雲は透けるという「濃淡」についても言葉にしているね。

しほの先の方は
一番遠いから雲を
透けようによさ

【ふりかえる過程】

手立て3

造形的な視点を基に、自分なりの表現の工夫を言葉にして価値付ける活動の設定

自分なりの言葉で工夫を表す

奥行きを表す工夫として、「重ねて隠す」「手前と奥で大きさを変える」「はっきりと薄い(濃淡)」の三つを挙げている。活動中に言葉にしたことを作品に表せたから、次の題材でも生かせるね。

このウバ龍は、はるか空にいる生物です。特にこだわったのはウバ龍の体です。奥の体は小さく手前に来るほど大きくなるように描きました。雲に隠れながらくねくね近付いてくるようにしたので、奥は薄く手前は濃くなりました。雲は全部で9個のうち2個の雲が立体感が出せました。残りの7個は遠く感じを出せる雲にしました。ぼく的には評価は10点中9点です。奥から手前にするとどんどん近付き迫力が出せる絵となることが分かった。絵は奥行きを理解して描くと普通の絵より迫力が出て格好よくなる。

成果

造形的な視点について、感じたことは自分なりの気付きであり、それを言葉にするとより意図的に生かしながら主題を膨らませることができた。それにより、児童は表しながら造形的な視点を基に作品を振り返り、よりよく表すために自分なりの工夫を積み重ねる姿が見られた。

課題

児童は、自分が言葉にしたことを基に主題を膨らませ、表現していく。教師は活動の中で、児童の言葉が造形的な視点を捉えているかどうかを判断し、主題につながるような言語化を促す必要がある。